

「誠実な伝言ゲーム」

前任地である倉敷教会には、竹中幼稚園という、当時はまだ私学助成を受ける旧制度の幼稚園がありました。今は、認定こども園化して、私が知っている頃とは様子が違っているかも知れません。竹中幼稚園では、毎年の卒園式が終わった後、保護者会の主催で「謝恩会」が開かれていました。幼稚園の教職員と、倉敷教会の主任牧師と伝道師が招かれまして、笑いあり、涙ありの思い出深いひと時を過ごします。「涙あり」については特に説明は要らないと思います。保護者も先生たちも感極まっているわけですから、自然と涙は流れます。卒園児の中にも、感受性や想像力の強い子どもは、卒園や別れを理解して泣いたりもします。一方「笑いあり」については、これは毎回、私にとってはなかなか衝撃的でした。その衝撃的だった理由は、まず、私が教会では伝道師という未熟で新入社員のような位置づけであったこと、幼稚園では教員や職員とはまた、ちょっと異なる「若いお兄さん」という立ち位置だったことが影響しています。つまり、何が言いたいかと言います、私は、毎回の「謝恩会」で体の良い「いじられ役」だったということです。伝道師 3 年目で私が出席する最後の「謝恩会」の時、食事の余興で伝言ゲームをしました。私は直接、それには加わらなかったんですが、卒園児と保護者で 4 チームくらいに分かれて、伝言ゲームに興じていました。子ども達が楽しそうに伝言を耳打ちしている風景は微笑ましかったし、結果発表の時も大いに盛り上がりました。それほど難しい問題はなく、正答率もなかなか高かったと思います。ただ、最後の対戦で、私は大恥をかくことになりました。これは、伝言ゲームのお題を考えた保護者の悪ノリが過ぎたのだと思います。最後の対戦で、あるチームが、回答発表で、こういう伝言を叫んだんですね。「せーの、有岡先生は、かっこつけ!」。・・・。伝言ゲームの様子を拍手しながら眺めていた私には、何の落ち度もなかったはず。なんで、かっこつけというレッテルを張られなければならないのか。まあ、その時は、大いに盛り上がったので、若手芸人並みの伝道師としては有り難いことだったのですが、この話のオチは、最後の対戦で、伝言すべきもともとの言葉は、「有岡先生、格好つけて」だったんですね。この伝言ゲームの理不尽なのは、伝言された言葉を実際に実行しないといけないというところで、何の罰ゲームか知りませんが、やりましたよ、みなさんの前で格好つけたポーズを。さらに言えば、会の終わりに、もっと自信をもって格好つけられないと良い牧師に

はなれませんよ、と貴重なダメまで頂きました。人前に立つこと自体は、もうだいぶ慣れましたが、本当にそういう目立ち方だけは勘弁して欲しいというのが正直なところですよ。

なんの話だが、よく分からなくなってしまいそうなのですが、今日のテーマは、「伝言ゲーム」です。結論から言ってしまうと、私たちクリスチャンは神様から様々な形で伝えられる福音という名の言葉を、できるだけ正確に、できるだけ神様の御心に適うように、この世へと語り伝えていくことが、ひとつの使命であるといえます。勝手な思いや、偽りや、作り話を付け加えて、神様の御言葉を捻じ曲げてしまうことは、できる限り避けたい。それが、今日の聖書箇所（エゼキエル書）の主題でもあります。要となるのは7節のところですよ。「お前たちが見ているのはむなしい幻、お前たちが口にしているのは欺きの占いではないか。わたしが語ってもいないのに、『主は言われる』と言っている」と。当時から、「主は、こう言われる」とか「神様の御声は、こうである」という言い回しは、聞く者に有無を言わせない強制力を持っていました。今回の聖書箇所であるエゼキエル書にも、また、同時代に成立したエレミヤ書などにも、このような偽預言や似非占いに対する警告の記事を載せられていることには、実際として正当な預言者たちの活動を阻害する、困った預言行為があったからですよ。具体的な一例としては、イスラエルを存亡の危機に追い込んだバビロニアが発祥の預言者たちが、テキトーな預言行為を続けていたと言います。バビロニアの預言者たちの言葉というのは、人々を無理に楽観的にさせたり、臭いものに蓋をしたりするような、聴く者にとって差し当たり心地の良いものばかりであったということです。そして、そのような大衆迎合的な預言に対して、「お前たちが見ているのはむなしい幻、お前たちが口にしているのは欺きの占いではないか」という神様の怒りの預言がエゼキエルに与えられたのでした。

神様の御言葉や、聖書の御言葉と言うのは、捉えようによっては、とても便利なものです。「これは神様から示された」という事にして、都合の良い言葉をねつ造し、人心掌握を図ったという出来事は、私たちの歴史において、大小様々、結構あったんじゃないかと思えます。

デンゼル・ワシントンというアメリカの俳優が主演している「ザ・ウォーカー」という映画があります。文明が崩壊した終末的な近未来を舞台にした作品なのですが、「ザ・ウォーカー」と言うのは日本向けのタイトルで、もともとのタイトルは主人公イーライの名前を入れた「The Book of Eli」となっています。The という定冠詞を付けた頭文字が大文字の Book という単語は、ただの本を意味するのではなくて、The Book という時、それは聖書のことを表します。この映画は、世

界で唯一残された最後の The Book である聖書を隠し持っている主人公イーライが、環境的にも文明的にも荒廃した世界を舞台に、聖書を狙う独裁者の魔の手から何とか逃げようとするというのが、ストーリーの本筋となっています。ここで興味深いのは、何故独裁者が聖書を奪おうとするのか、という理由です。ゲイリー・オールドマンという悪役をやらせたら素晴らしい俳優さん演じる独裁者カーネギーは、聖書を奪う理由についてこう言うのです。「聖書は、この世で一番強力な武器である」と。あらゆる知識や知恵が荒廃した終末的な世界で、聖書は人々を導く素晴らしい書物である、と言う事は、聖書を信じる私たちにとって納得できることです。しかし一方で、そんな素晴らしい聖書は逆に、読み方や、語り方、その用いる方法を少し変えれば、何も知らない人間を、神の言葉という権威の下で支配することができる最強の武器になり得る、とこの映画の中では語られます。劇中のこの独裁者カーネギーのセリフを聴くまで、私は聖書というものを、そんな風に捉えたことはなかったのですが、確かに、歴史的な宗教対立の根本には、よくよくこの聖書から取られてきた主義主張が存在し、その時々による都合の良い解釈によって、神様の言葉は人を傷付け、支配するために用いられて来たことは否めないな、と思います。私たちは、そういうキリスト教と聖書の嫌な歴史的事実を受け止めつつ、この聖書という神様と人の知恵が詰まった世界一のベストセラーを読む必要があるのだと思います。

とは言え、否定できない事実として、この聖書を完全に理解し、完全に語ることにはそもそも無理であると言わざるを得ません。いつも講壇から説教をする立場の私が言う言葉では無いかも知れませんが、常に正直に「聖書の言葉は難しい」と感じています。どんなに努力して、正しく読もうにも聖書に書かれた本文と、私たちの生きる現代との文化的、時代的な差があることは周知の事実ですし、そもそも完全な言葉として書かれ切れていない聖書箇所も多々あります。

ただ、それでも、この本を読む価値はあるんですね。そして、語る価値もあります。この聖書から、力をもらって逞しく生きた人は沢山います。また、知恵をもらって賢く生きた人も沢山います。弱さを知って謙虚に生きた人も、希望を知って明るく生きた人もいます。この聖書には読む価値がある、とそう思うことが、信仰の第一歩と言えるでしょう。そして、その次に重要となるのが、「この聖句って結局、何が言いたいのだろうか」という問いを持ち続けることです。冒頭に笑い話で紹介した伝言ゲームでは、ゲーム途中で伝えられた伝言が支離滅裂になったからと言って、お題をくれた人に聴きに行くのはルール違反です。しかし、聖書を読むということに関しては、いつで

もお題提供者に対して、つまり神様に対して「これって何が言いたいんですか？」と聴いて良いのだと思います。と言いますか、そうやっていつでも確認するくらいの丁寧さがある方が謙虚で素敵だと思います。「この聖句は、こういう意味なのだ」「この御言葉はこれを示している」「神様の御心とは、これである」と、自分の信仰的確信に基づいて力説することを禁じる決まりはありませんが、ただ、そう力説し、断言するだけの根拠が、果たして私たちにはあるのか、という問いは常に持っておくことが大切です。私たちが信仰について語ることのできることは、つまるところ全て神様から「お預かりした言葉」なのです。「主の祈り」を初め、私たちの大切にしている信仰の言葉は、すべて聖書に由来し、神様とイエス様からお預かりしたものです。お預かりしている物に対して、それを自分の物だと主張するような暴挙は普通しないように、預かった物は預かった物として丁寧に扱い、いずれお返しするなり、あるいは、他の誰かにお渡しするものです。だから、私たちは、神様から頂いた聖書という名の御言葉を、時に意味を尋ねつつ丁寧に聴き、時に人の心に届くよう雄弁に語り、その御言葉が神様の御心に適う形で伝え広まっていくようにと、努めていくことが大切だと思います。

何度でも聞き返し、何度でもやり直せる、そんなルール無用の宣教という名の伝言ゲームを、私たちはこれからもひたむきに続けて参りたいと思います。今、私たちは、私たちに語るべき言葉を与えて下さる聖霊が降り注いだ、ペンテコステを私たちは迎えています。かつての弟子たちが受け取ったのと同じ聖霊の力と言葉が、今の私たちにも、再びきっと備えられるのだと私は信じています。

お祈りを致します。

神様。いつもあなたより降り注ぐ、恵みの御言葉と聖霊とを感謝致します。この世界には、あなたの御言葉を必要としている人たちがたくさんいます。私たちの近くにもいます。どうか、私たちがあなたの御名によって、豊かな救いの福音を広く、深くこの世界へと語ってゆくことができますように。あなたからお預かりした言葉を、丁寧に聴き、雄弁に語るができますように。どうか支え導いてください。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

6月誕生者の祝福祈祷

聖書：詩編 71 編 14～19 節

14 わたしは常に待ち望み／繰り返し、あなたを賛美します。15 わたしの口は恵みの御業を／御救いを絶えることなく語り／なお、決して語り尽くすことはできません。16 しかし主よ、わたしの主よ／わたしは力を奮い起こして進みいで／ひたすら恵みの御業を唱えましょう。17 神よ、わたしの若いときから／あなた御自身が常に教えてくださるので／今に至るまでわたしは／驚くべき御業を語り伝えて来ました。18 わたしが老いて白髪になっても／神よ、どうか捨て去らないでください。御腕の業を、力強い御業を／来るべき世代に語り伝えさせてください。19 神よ、恵みの御業は高い天に広がっています。あなたはすぐれた御業を行われました。神よ、誰があなたに並びえましょう。

羽根勝彦兄	はね かつひこ	6月19日生まれ
谷口一夫兄	たにぐち かずお	6月24日生まれ
小牧伸輔兄	こまき しんすけ	6月26日生まれ

神様。

私たちは、6月最初の聖日に、こうして5月生まれの方々のことを憶えて祈りを合わせています。あなたは、私たちが母の胎内にいる時から、私たちのことを見つけ、今に至るまで導いてくださいました。この6月生まれの方々も、それぞれの人生において、あなたのことを知り、あなたに導かれてきたことを受け入れて、主と共に歩むものとされました。どうか、あなたを見上げ、その御心に従おうとされる方々を豊かな祝福で満たしてください。また、人は一人では生きてはゆけません。6月生まれの方々も沢山の人の支えられ、今という時間を歩んでおられます。この方々の周りには掛け替えのないご家族、ご友人の上にもあなたの恵みが注がれますように、祈ります。

この感謝と願い、尊き主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。